

松本平方言の -ッ を用いた意志表現

——新しい形式の広がり——

上 條 厚

キーワード： -ッ ラ 意志表現 従来型 四段型

1. 始めに

松本平方言の -ッ を用いた意志表現の変化について述べる。その変化は松本平全体におけるものかどうか、断ずることは難しい。ただし少なくとも筆者の出身地である東筑摩郡朝日村においては、40年前（1970年ころ）の言い方と現在とで大きな違いがあり、以前にはなかった新しい言い方が現れている。

ここで言う -ッ を用いた意志表現とは次のようなものである。共通語と対照させる。

読もうと思う。	ヨマツト オモウ。
見ようと思う。	ミツト オモウ。
しようと思う。	シツト オモウ。
来ようと思う。	コツト オモウ。
読もうかと思う。	ヨマツカト オモウ。
見ようかと思う。	ミツカト オモウ。
読もうとする。	ヨマツト シル
見ようとする。	ミツト シル。
貸してやろうか。	カシテヤラッカ。

なお上記は、筆者が生得した従来からの言い方だけを挙げたものであり、現在は別の言い方がこれに加わっている。

この -ッ を用いた意志表現の形式は、共通語の意志を表す場合の -ウ・-ヨウ に相当するが、-ッ だけで言うことはなく、必ず ト・カ(ト) を後接させ、またほとんどの場合 オモウ・シル (=する) を後続させて言う。

このような -ッ に関して、馬瀬(1992)は以下に引用するように述べている。松本平に限らず、意志を表す表現に -ズ があるが、馬瀬(1992)はこのことを述べ、例文として ミズ(見よう)、コーズ(コズ)(来よう)を挙げた後、続けて次のように書いている。

-ズは助詞-トや-カが続くと次のように-ツとして用いられる。

イカツト オモウ（行こうと思う）。

カカツト シタ（書こうとした）。

イカツカト オモウ（行こうかと思う）。

イカツトを例にとると、'ikazuto > 'ikasuto > 'ikaqto の音韻変化により成立したもので、後続子音 t への同化である。イカツカの成立もこれに準じる。

2. -ツ を用いた意志表現の変化

このような -ツ を用いた意志表現に筆者生得のものと違う言い方が現れており、筆者の出身地である東筑摩郡朝日村を含めた松本平で現在行われている。四段活用の動詞においては筆者のものと違いがなく、それ以外の一段活用と変格活用の動詞で違っている。最初の例に挙げた動詞の「見る」「する」「来る」について言うと、「見る」は筆者生得のものは ミット・ミツカト である。現在行われるものはそれに加えて ミラット・ミラツカト がある。同様に「する」「来る」は筆者は シット・シツカト、コット・コツカト であるが、現在行われるものは、シラット・シラツカト、コラット・コラツカト が加わっている。これを形だけから見れば ラ が挿入されたということであるが、これは ミル・シル（=する）（「する」は当地では一段化し シル となっている）・クル が四段動詞型に活用したものである。一段活用の動詞と変格活用の動詞で、こういう筆者の言わない言い方がされている。以下このことに関して述べる。

ここで筆者の言語背景について述べる。居住歴は、東筑摩郡朝日村1947年生～1970年、長野市1970年～1973年、その後東京都に17年、長崎県に2年半住んだ後、1992年以後松本市に住んでいる。筆者は、家庭内と同郷出身の友達との間では方言を使用するが、筆者の方言は20歳代前半まで朝日村に居住する間に自然修得したものである。言語は時の経過とともに変化することがあるが、筆者はその後40歳代前半まで松本平に住まなかったこともあり、方言の変化の影響は受けていないと自分自身考える。筆者の脳裏にある方言は1970年ころの朝日村のものであり、それがそのまま変化していないと考える。

ここまでに既出の言い方の中で、ミラット・ミラツカト、シラット・シラツカト、コラット・コラツカト については、前述したように、筆者は言わない。40年くらい前（1970年ころ）までの東筑摩郡朝日村には、このような ラ の挿入された言い方はなかった。そのことは断言することができる。また筆者は40歳代前半に松本市に居住する以前には、松本平でそういう言い方を聞いた記憶がない。ではそれらが以前の松本平に全然なかったのかというと、それについて言うことは難しい。筆者が耳にしなかっただけ、あるいは耳にしても記憶に残らなかっただけという可能性もある。これについては何とも言えないが、朝日村になかったことは確実である。それが、以下に調査に基づいて述べるように、現在では朝日村を含めて、多く使われているのである。

次に文献に載っているものを見ておく。末尾に挙げた文献における -ツ を用いた言

い方の一段活用動詞・変格活用動詞の例を、すべて挙げると次のとおりである。なお、「もって」等＝「思って」等。

馬瀬(1992) 「デカケット シル」 (上伊那郡長谷村 (現伊那市))

馬瀬(1987)は民話 (上伊那郡中川村) の語りの文字化である。そこに出ているのを整理して挙げると次のとおり。(文字遣いを改めたところがある) 「借りっと もって」「借りっと もったらば」「食べっと もってー」(3回)「投げっと もったら」「上げっと もったんに」「せっと (←する) もーが」「開けてみっと もったらば」「差し出してみっと もって」

飯豊(1983)「山梨県の方言」(稲垣正幸・清水茂夫) 西部方言として「起きっか」「受けっか」「こっか・きっか (←来る)」「しっか (←する)」(掲載の表により再構成)

同上「静岡県の方言」(中條修) 静岡市小鹿方言として「見っか」「食べっか」「貸せっか」「しっか (←する)」「こっか (←来る)」(掲載の表により再構成)

日本放送協会(1981) ツケット モッタラ (上伊那郡高遠町山室 (現伊那市))

馬瀬(1980)には馬瀬(1992)と同一の例が載っている。

馬瀬(1971) 「シッカト 思ッテ」(松本市)

青木(1948) 「行って来っか (西筑、奈川 (現松本市))」「早くせっと (←する) もって (下伊、伊賀良 (現飯田市))」

以上、ほとんど松本平以外の例であるが、ラ が挿入された形は1つも載っていない。このことは ラ が挿入された形が以前はなかったか、あっても少数であったことを物語っている。

3. 当地の動詞の活用

表 1

語		語幹	1	2	3	4	5	6
四 段	読む	'jo(m)	a	i	u	e	ø	(N)-
	買う	ka(')	wa	i	u	e	ø	(Q)
一 段	見る	mi	ø	ø	ru	ro	r	ø
	食べる	tabe	ø	ø	ru	ro	r	ø
変 格	しる(する)	s(i)	ø (a)*	ø	ru	ro	r	ø
	来る	k(u)	(o)	(i)	ru	(o)'i	r	(i)
後 続 形 式			neE nanda oto	中止 masjo	終止 zura koto	命令終止 'ja	jaE	te -de ta -da cura -zura

※ /saseru/ /sareru/ の場合。

() は、かちあうときに交代する。かちあわないときはそのまま続ける。

- のあるものは - のあるものと、ないものはないものと接続する。

筆者の方言の動詞活用表を、内省に基づいて、簡略化して示すと表1のとおりである。四段動詞は「読む」「買う」で代表させておく。「する」は一段化してシルとなっているが、一段動詞と完全に同じになっているわけではないので、変格活用に分類しておく。

この表の活用形1が、-ッ を後続して意志表現となるものである。/qto/ /qkato/ が後続して /'jomaqto/ /'jomaqkato/ /miqto/ /miqkato/ などとなる。現在行われる ミラット・ミラッカト、シラット・シラッカト 等を言う場合は、一段活用・変格活用の活用形1に ra が加わることになる。

4. 使用状況の調査

以下において ミラット・ミラッカト、シラット・シラッカト のように、一段活用・変格活用の動詞が四段動詞型に活用したものを「四段型」と呼び、従来からのものである ミット・ミッカト、シット・シッカト 等を「従来型」と呼ぶことにする。

四段型の使用状況を調べることを主目的として、少人数対象かつ狭い範囲ではあったが調査を行った。その調査に基づいて述べる。

調査したのは一段活用の動詞と変格活用の動詞についてであり、従来型・四段型合わせて調査した。調査の対象としたのは60歳以上の人で、それぞれの地に長く居住し、しかも方言をよく使うと思われる人たちである。60歳以上としたのは、その人たちは40年前には ミラット・ミラッカト、シラット・シラッカト のような四段型の言い方をしなかった、あるいはしなかった可能性のある人たちだからである。調査した時期は2010年12月と2011年1月である。

調査は表2に挙げる -ッ を用いた意志表現それぞれについて、言うか言わないかを調査対象者に確認する方法で行った。調査する動詞については普段の生活でよく使うものを、できるだけ多くの行にわたって選んだ。調査対象者は次のとおりである。居住歴を記す。

東筑摩郡朝日村 男A： 朝日村1943生～1962 外地1962～66 朝日村1966～

東筑摩郡朝日村 女N： 松本市寿豊岡1950生～70 朝日村1970～

松本市寿豊岡 男T： 松本市寿豊岡1942生～

松本市寿豊岡 女H： 松本市寿豊岡1946生～

松本市大村 男K： 松本市大村1937生～

松本市大村 男Y： 松本市大村1945生～

松本市大村 男S： 松本市大村1946生～

表 2

記号の説明

○…言う

△…言うかもしれない ～ あまり言わない (言う可能性あり)

× …言わない

聞 …言わないが、聞く

「言わない」の集計 × は 1、△ は 0.5 とする。聞 は × に含める。

表中の語、当地の方言で しる=する、うでる=ゆでる。

動 詞	形 式	東 筑 摩 郡 朝 日 村 男 A	東 筑 摩 郡 朝 日 村 女 N	松 本 市 寿 豊 岡 男 T	松 本 市 寿 豊 岡 女 H	松 本 市 大 村 男 K	松 本 市 大 村 男 Y	松 本 市 大 村 男 S	言 わ な い の 集 計
変 格	しる (する)	△	△	○	○	○	○	○	1
	シット シツカト シラット シラツカト セラット セラツカト	○ ○ ○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○ × ×	○ ○ ○ ○ × ×	○ ○ ○ ○ × ×	○ ○ ○ ○ × 聞	○ ○ ○ ○ × ×	○ ○ ○ ○ × ×	6 7
格	来る	○	○	○	○	×	○	○	1
	コット コツカト コラット コラツカト キット キツカト	○ ○ ○ ○ × ×	○ ○ ○ ○ × ×	○ ○ ○ ○ × ×	○ ○ ○ ○ × ×	× 聞 聞 聞 ○ ○	○ ○ ○ ○ △ △	○ ○ ○ ○ △ △	1 1 1 1 5 5
上	いる	○	○	○	○	○	○	○	0.5
	イット イツカト イラット イラツカト	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ 聞	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	1 1
一 段	着る	△	△	○	○	○	○	○	1
	キット キツカト キラット キラツカト	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	
一 段	起きる	○	○	○	○	○	○	○	
	オキット オキツカト オキラット オキラツカト	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	
一 段	生きる	○	○	○	○	○	○	○	
	イキット イキツカト イキラット イキラツカト	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	
一 段	煮る	○	○	○	○	○	○	○	
	ニット ニツカト ニラット ニラツカト	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	

上 一 段	浴びる	アビット アビッカト アビラット アビラッカト	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	
	見る	ミット ミッカト ミラット ミラッカト	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	
	降りる	オリット オリッカト オリラット オリラッカト	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	
	借りる	カリット カリッカト カリラット カリラッカト	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	
下 一 段	替える	カエット カエッカト カエラット カエラッカト	○ ○ × ×	○ ○ × ×	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ × △	○ ○ ○ △	3 4
	教える	オシエット オシエッカト オシエラット オシエラッカト	○ ○ × ×	○ ○ × ×	○ ○ ○ △	○ ○ ○ △	○ ○ × ×	○ ○ ○ ×	3 6
	掛ける	カケット カケッカト カケラット カケラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ △	○ ○ ○ △	○ ○ × ×	○ ○ ○ ○	1 4
	つける	ツケット ツケッカト ツケラット ツケラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ △	○ ○ ○ △	○ ○ × ×	○ ○ ○ ○	1 5
	上げる	アゲット アゲッカト アゲラット アゲラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ △	○ ○ ○ △	○ ○ × ×	○ ○ ○ ○	1 5
	逃げる	ニゲット ニゲッカト ニゲラット ニゲラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ △	○ ○ ○ △	○ ○ × ×	○ ○ ○ ○	1 4
	見せる	ミセット ミセッカト ミセラット ミセラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ △	○ ○ ○ △	○ ○ × △	○ ○ ○ ○	1 4.5
混ぜる	マゼット マゼッカト マゼラット マゼラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ △	○ ○ ○ △	○ ○ × ○	○ ○ ○ ○	1 4	

下 一 段	捨てる	ステット ステツカト ステラット ステラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○	1 3
	立てる	タテット タテツカト タテラット タテラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○	1 4
	出る	デット デツカト デラット デラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ △	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○	1 3.5
	うでる(ゆでる)	ウデット ウデツカト ウデラット ウデラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ △	○ ○ ○ △	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○	1 4
	寝る	ネット ネツカト ネラット ネラッカト	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ 聞 △	○ ○ ○ ○	1 0.5
	真似る	マネット マネツカト マネラット マネラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ △	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○	1 3.5
	食べる	タベット タベツカト タベラット タベラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ △	○ ○ ○ △	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○	1 4
	くべる	クベット クベツカト クベラット クベラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ △	○ ○ ○ △	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○	1 4
	詰める	ツメット ツメツカト ツメラット ツメラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○	1 3
	止める	トメット トメツカト トメラット トメラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ △	○ ○ ○ △	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○	0.5 4
	入れる	イレット イレツカト イレラット イレラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ △	○ ○ ○ △	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ○	1 5
	別れる	ワカレット ワカレツカト ワカレラット ワカレラッカト	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ △	○ ○ ○ △	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ △	3 4.5

	食わせる	クワセット	○	○	○	○	○	○	○	3 6
		クワセツカト	○	○	○	○	○	○	○	
		クワセラット	×	×	○	○	×	○	○	
		クワセラッカト	×	×	△	△	×	×	×	
複 合 上 一 段	見ている	ミテイット	○	○	△	△	○	○	○	1 1 1 2
		ミテイッカト	○	○	△	△	○	○	○	
		ミテイラット	○	○	○	○	×	○	○	
		ミテイラッカト	○	○	△	△	×	○	○	
	待っている	マッテイット	○	○	△	△	○	○	○	1 1 1 2
		マッテイッカト	○	○	○	○	○	○	○	
		マッテイラット	○	○	○	○	×	○	○	
		マッテイラッカト	○	○	△	△	×	○	○	
食べてみる	タベテミット	○	○	○	○	○	○	○	1 1 1 2	
	タベテミッカト	○	○	○	○	○	○	○		
	タベテミラット	○	○	○	○	×	○	○		
	タベテミラッカト	○	○	△	△	×	○	○		
読んでみる	ヨンデミット	○	○	○	○	○	○	○	1 1 1 2	
	ヨンデミッカト	○	○	○	○	○	○	○		
	ヨンデミラット	○	○	○	○	×	○	○		
	ヨンデミラッカト	○	○	△	△	×	○	○		

5. 結果の考察

表に示したように、「言わない」の数値の集計もした。

始めに表にある変格活用の セラット・セラッカト、キット・キッカト について断っておく。これは調査前には予想しなかった形式である。いずれも筆者は言わない。調査時に調査対象者から、こういう言い方もあると言って示されたものである。セラット を言う話者Aは最初に調査した人であったので、それ以後それを調査項目に加えた。キット・キッカト を言う話者Kは中間に調査した人であったので、すでに調査した人には電話でそれを言うかどうか確認した。セラット を言うのは朝日村の話者Aだけである。セラッカト は話者Kが 聞 である。これらは以前なかった新しい形であろう。キット・キッカト については、話者Kが ○、話者Y・話者Sが共に △ である。これらの話者は皆、松本市大村であるが、この由来について考えることは難しい。なお キラット・キラッカト という形はないようである。

次にまず従来型（キット・キッカト は除外しておく）について見る。従来型は少し △ があるものの、それ以外はほとんど ○ であり、× と 聞 は1つのみである。以前に変わらず安定して使われていると言うことができる。話者Kは「来る」で コット ×、コッカト 聞 である。ただしその代わり キット・キッカト が ○ である。また話者Kは「いる」の イッカト が △ である。話者Aと話者Nは「しる」の シット、「着る」の キット が △ であるが、これは短い語なので言いにくいからだろうか。複合上一段「見ている」の ミテイット・ミテイッカト、「待っている」のマッテイットは △ が2つずつあるが、これは動詞の複合なので、この言い方が言いにくいという

ことだろうか。ただし動詞の複合でも「食べてみる」「読んでみる」はすべて○である。

次に四段型を見る。

変格（セラット・セラッカトは除外しておく）と上一段（複合上一段を除く）は、話者Kに4つ聞があるほかは、すべて○である。従来型で「しる」のシット、「着る」のキットが△である話者A・話者Nも、四段型では○である。四段型がほとんど定着していると言ってよいであろう。朝日村で40年前には四段型がなかったことを筆者は断言するが、朝日村の話者Aは四段型を言うようになっている。朝日村の話者Nは松本市寿豊岡の出身であるので、40年前の状況で筆者が断言できるものはないが、調査結果はすべて○である。以上、変格動詞と上一段動詞では四段型が定着していると言うことができよう。

次に複合上一段を見る。まず話者Kはすべて×である。話者T・話者Hは、「見ている」のミテイラッカト、「待っている」のマッテイラッカト、「食べてみる」のタベテミラッカト、「読んでみる」のヨンデミラッカトが△である。動詞の複合したものなので言いにくいということだろうか。複合上一段は全体としては、ほぼ定着という程度と言うべきであろう。

次に下一段を見る。これは変格・上一段と様相が違う。変格・上一段に比べて△×が多い。「言わない」の数値が大きくなっているのが下一段である。話者Kについては「寝る」でネラット聞、ネラッカト△、「止める」でトメラット△であるほかは、すべて×である。-ラットと-ラッカトの別でも違いがあり、-ラッカトの方が「言わない」の数値が高くなっている。

-ラットについて見る。話者Kは前述のように「寝る」でネラット聞、「止める」でトメラット△であるほかは、すべて×である。話者A・話者Nについては「替える」「教える」「別れる」「食わせる」の4つにおいて×であるが、ほかはすべて○である。他の人たちについてはすべて○である。したがって-ラットは、話者Kを除けばほぼ定着していると言うことができよう。

次に-ラッカトについて見る。話者Kは前述のように「寝る」でネラッカト△であるほかはすべて×である。話者Aは「寝る」でネラッカト○であるほかはすべて×である。話者Nは「掛ける」でカケラッカト○、「寝る」でネラッカト○であるほかは、すべて×である。

「寝る」については話者K・話者A共にネラッカト○であるが、他の回答が×ばかりである話者Kも、ネラット聞、ネラッカト△としている。「寝る」は短いことばなのでラが加わりやすいということが想像される。

他の人たちの-ラッカトは○が比較的多いが、全部○という人はいない。-ラッカトは他に比べて「言わない」の数値が高くなっている。ある程度定着しているが定着が完全とは言えない程度と言うべきであろう。

「食わせる」について言うと「言わない」の数値が、クワセラット・クワセラッカト共に高い。「食わせる」は「食う」からの派生型であるために、言いにくいということがあるかもしれない。

話者Kは下一段動詞ではほとんど全部 × であるが、松本市大村の調査対象者の中で話者Kは70歳代、他の人は60歳代である。話者A・話者Nは下一段動詞では × が多いが、2人は松本市の中心から離れた朝日村の居住である。このことが調査結果と関係あるかどうか、この調査だけで論ずることはできないが、指摘しておく。

6. まとめ

以上、調査結果に基づき、一段活用の動詞と変格活用の動詞での -ッ を用いた意志表現の使用状況を見た。従来型は以前と変わらず安定している。四段型は少なくとも朝日村には40年前になかったものであり、松本平の他の地方にもなかったか、あったとしても少数のものであったと考えられるが、現在では多く使われている。変格活用の動詞と上一段活用の動詞についてはそれが定着していると言える。動詞の複合上一段ではほぼ定着と言える程度である。下一段活用の動詞については -ラット はほぼ定着と言える。-ラッカト はある程度定着である。

四段型は定着の程度から見て、変格活用と上一段活用から始まったと考えられよう。それが下一段活用にも広まり、まず -ラット で定着が始まり、続いて -ラッカト に及んでいる、このように考えられよう。

今回の調査は少人数対象かつ狭い範囲のものであった。もっと多人数対象でかつ広い範囲で調査を行えば、さらに興味深い結果が得られる可能性がある。それは後日に期することにする。

文 献

- 馬瀬 良雄他 2010 『長野県方言辞典』
国立国語研究所 2005 『日本のふるさとことば集成 第8巻 長野・山梨・静岡』
馬瀬 良雄 2003 『信州のことば』
国立国語研究所 2002 『方言文法全国地図』 5
馬瀬 良雄 1992 『長野県史 方言編』
馬瀬 良雄 1987 『伊那谷の民話とわらべ歌』
長野県教育委員会 1986 『長野県方言緊急調査報告書』
飯豊 毅一他 1983 『講座方言学6 中部地方の方言』
日本放送協会 1981 『全国方言資料』
馬瀬 良雄 1980 『上伊那の方言（長野県上伊那郡誌第五巻民俗篇下）』
馬瀬 良雄 1971 『信州の方言』
青木 千代吉 1948 『信州方言読本 語法篇』

(信州大学 全学教育機構 教授)

2011年1月12日受理 2011年2月3日採録決定